

---

# 僕と逢との一泊二日

まなつか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と逢との一泊二日

### 【Nコード】

N9040V

### 【作者名】

まなつか

### 【あらすじ】

祝 二期決定！！！！ アマガミSS二期決定を祝して勝手に連載を始めました。

後輩である七咲逢と付き合い始めたクリスマスから半年。橘純一と逢は一緒に田舎に泊まりで旅行に行くことにした。初めて過ごす、一緒に夜 橘純一はいったい何をしてくれるのだろうか。

## 第一話「到着」

バスを降りると乾いた爽やかな風が僕らを包み込んだ。

「わぁー！ やっぱ空気が違いますね」

バスが遠ざかった後、逢がそばに歩み寄ってくる。

「そうだね…… やっぱり違うなあ……」

ん〜と僕と逢は大きな伸びをした。

「先輩、一面緑の絨毯ですね」

「ん、ああ、そうだね。ここらは米の生産地で有名なからね」

「へえ…… 詳しいですね」

「はははっ、ちよつと調べたらからね」

「そうなんですか。…… それで今からどこに行くんですか？」

「んーと……」

僕と七咲逢は二人で旅行に来ている。ペアチケットが当たって田舎旅行なのだ。美也が悔しそうにしていたが、何かおみやげを買ってきてやると言っ出てきた。

「逢ちゃんに変なことしないでよー？」

美也のヒトコトが思い出される。

ふっとこちらを見つめている逢の顔を見た。

……変なこと……。

「せ・ん・ぱ・い！ なにぼーつとしてるんですか？」

「うわああっ！ ……ご、ごめん…… ははは」

ダメだダメだ。今はこれからのことを考えよう。

えーと、行き先は……

「あの旅館みたいだね」

「あ、あの旅館ですか。近いんですね」

「僕と逢の距離のほうがもっと近いよ」

「変なこと言わないでください」

「あ……あははは」

一蹴されてしまった。

僕と逢はその旅館の方へ舗装されていない道路を歩き始めた。  
周りの森からはセミがワンワンと鳴き続けていた。

## 第一話「到着」(後書き)

祝 二期決定!!!

もう最高です。

明日学校なのにもう眠れそうにありません。

七咲がとにかく可愛くて七咲が欲しくて、七咲が（ry

## 第二話「門」

「ここですね」

僕と逢は大きな古い門の前に立っていた。

「へえ……なんかすごい歴史の有りそうなところだね」

「そう……ですね」

「ごめんくださーい！」

僕は手を筒にして叫んでみた。

「先輩先輩！ やめてくださいよ！ 恥ずかしいじゃないですか！」

「えっ……？ じゃあどうやって叫べばいいんだい？」

「そういう問題じゃなくって……ほら、そこに呼び鈴があるじゃないですか」

七咲が指さす先にはその門には似合わないインターホンがついていた。

「待て、七咲。これを押すとこの旅館が吹っ飛んでしまつかもしれん……」

「い・い・か・ら！ 早くしてくださいよ！」

「わ、わかったよ」

僕はそーっとボタンに指をかけた。

その時

## 第二話「門」（後書き）

こんにちは。まなつかです。

いやー、夏真っ盛りですねー。

なんかいろいろ忙しくて小説を書いている暇がありません。  
更新頻度は落ちますが、どうかご了承ください。

さて、ゲームの方のアマガミですが……

とうとう手放すことに決めました。

気がつくとそればかりやっているの……

一応、スト子のBADENDまでは見ました。美也かつこ良かったです。

そして七咲は最高です。

スカート捲りしたら泣かれて学校いけなくなりました。

変態紳士最高です。

梅原の行動に毎回泣かされます。あいつ……なんで彼女できないんだろ。俺が付き合って（ry

さて、塾の宿題が溜まっているのでまた。

### 第三話「親友」

「お前……橘じゃねえか！」

「う、梅原っ?!」

「梅原先輩!？」

右 正門の横に付いている小さいもんから見慣れた梅原の姿が見えた。彼は和服を着ている。それがまた良く似合っていた。だが

こ、これはまずい……。

「あ、ああ……そういうことか。まあ、入んな」

「う、うん……」

僕と逢は顔を暫く見合わせた。

「ふふっ……行きましよう、先輩」

「う、うん」

僕は少しの不安を抱きつつこの旅館の名前を思い出していた。

『梅原旅館』と。

まさかね……まさかね……

「はははっ！」

「変なところで笑わないでください気持ち悪い」

「ひどっ」

#### 第四話「梅原」

「お……おお……」

門をくぐると大きな庭があった。大きな池もあり、いかにも日本庭園という感じがした。外は暑かったのだが、なんだかここは少しひんやりと感じる。

「先輩……涼しいですね」

「そうだね」

「お二人さんとも気につてくれたかい？」

「あ……うん。ところであのさ、なんで梅原がここにいるんだい？  
やっぱり梅原旅館って……」

「いやいや……ちげえよ。俺は寿司屋を継ぐことになってんだよ。  
今日は親戚のうちの手伝いでここに来てんだよ」

「ああ……！なるほどね！」

梅原がさつと僕の耳元で囁く。

「可愛い子がいるんだよ。昨日から泊まってるんだけどさ……」

「あはは……僕は逢……七咲がいるからねえ」

「おおつとそうだった。お前は……もう……」

「……」

梅原のふとした寂しそうな表情に僕は言葉を失ってしまった。

去年の今頃と違って梅原とあんな会話をすることは確実に減った。  
お宝本も梅原にほとんどあげてしまった。自然と梅原と接する機会が減ったような気がしていた。

「……いや、なんでもねえ。お二人さんご案内ーっ！」

梅原はもとの明るさを取り戻すと僕らを奥の方へと案内してくれ

た。

## 第五話「和菓子」

「それではごゆっくり！」

梅原の威勢のいい声と共にふすまがピシャリと閉まった。  
途端、静けさが部屋を覆う。

部屋は綺麗な和室だった。僕と逢は感嘆をあげた。

「いい部屋ですねー」

「うん、僕もびっくりしてるよ」

僕と逢は机を挟んで向い合って座布団に座った。

「先輩」

「ん、どうしたの？」

「どこかここらへんを観光しませんか？」

「あ、うん！ いいよ！」

「あ、でも少し休憩してからにしましょう」

七咲はそういうと慣れた手つきで電気ポットに入っているお湯を  
急須に入れてお茶をこしらえてくれた。

「どうぞ」

「ありがとう」

「ずーっ」

「うん、おいしいよ！ さすが逢が入れると違うね！ 梨穂子が入  
れるのとは味が違うよ」

「梨穂子……って誰ですか？」

「ああ、僕の幼なじみで茶道部にいる……」

「あ！ あの人ですか。見かけたことがありますよ。でもさすがに  
茶道部の人より美味しいっていうのは……」

「ううん、やっぱりいれてくれる人が違うと味も違うんだよ」

「そう……なんですかね」  
「うん！」

逢は照れているのか顔を赤らめて湯のみをくるくる回していた。

ずずーっ

「あ、お菓子もありますよ」

「じゃあひとつもらおうかな」

「はい」

「ありがとう」

逢から紙に包まれた和菓子を受け取った。

「ん、美味しいですよ」

僕も包装を破って中のお菓子を食べてみる。

「ん、ほひいいね！」

口の中に広がるあまーい風味……。

「先輩、口に物を入れたまましゃべらないでください」

「うっ……！」

やばい……喉に詰まったぞ！

「ゲホッゲホッ！」

「ちょ、ちよつと先輩！ 大丈夫ですか!？」

逢がこつちにやってきて背中をさすってくれる。

「ほら、お茶ですよ」

逢がさし出してきたお茶を飲むと少しは落ち着いた。

「ふー。危なかったー」

「だから言ったじゃないですか」

「はははっ、そうだね。これからは気をつけるよ」

「もう、心配掛けないでください」

逢のやさしい心遣いが心に染みてきた。

この部屋に和菓子のようにあまーい時間が流れていた。

## 第五話「和菓子」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

今、アマガミSSオリジナルサウンドトラックの『二人で抹茶を』を聴きながら執筆しています。

やっぱりいいですよねえ、日本の和って。

書いていて気づいたことが。

アマガミに細かい描写は必要ないような気がします。

なんか会話だけで想像できる……そんな感じがします。

というより、七咲と純一の姿がみなさんの頭の中に浮かんでいると思うんですよ！（浮かんでいなかったらすいません）

と、いうことで宿題を放棄した僕はもう少し頑張っていきます。  
それでは。

## 第六話「出発」

「そんじゃ、いつてらっしゃい！」

「ああ」

梅原の威勢のいい声に押されて僕らは宿をでた。

「ん〜！ やっぱ気持ちいいですね、先輩」

外に出ると涼しい風が僕らを包む。逢の綺麗な髪が風にたなびいた。

「それで、どこに行くんですか？」

「ん〜、そうだなあ」

そうこうしているうちにもうすぐ日がくれてしまっただろう。そうになるとこの近くで……たしか

町並みを見ないか？

・ラブホに行かないか？

やらないか？

「ここらへんの古い街並みでもみない？」

「あつ、それいいですね。行きましょう」

さっきの選択肢は一体なんだっただろう。

こうして僕と逢はバス停に行き、丁度運良く来たバスに乗り、次のバス停で降りた。

「先輩！ 見てください！」

逢の笑顔がそばにあるなら、僕はどこにでも連れていくだろう。



## 第六話「出発」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

まさか、橘純一ラブホに行かないか？  
を選択済みとは……おそ  
るべし。

## 第七話「買い物」

僕らはそこに多くある古くからの酒蔵などを見て回った。

「へえ……そういうものなんですか」

「ははっ、なんか面白い形をしているよね」

僕らは杉山を見ていた。

「ふさふさして気持ちよさそうですよね」

「うん、そうだね」

「あつ、あっちのおみやげ屋さん見てもいいですか？ 郁夫に何か買っていかないと……」

「うん、そうするか」

僕らは近くにある歴史が長そうなお土産屋さんに入った。  
なにか懐かしいような匂いがする。

「先輩、これなんてどうでしょうか？」

逢が手にしているのはストラップだ。

「こ、これはご当地限定のイナゴマスクのストラップじゃないか！」

「あ、そうです。郁夫にどうかと思ひまして……」

「うん！ これは喜ぶと思うよ」

「はい！ ありがとうございます。参考になりました」

「いやいや……」

僕も買おうかな……。

「すいませーん。これくださいー」

逢が店の奥にいる（ハズの）店員さんに声をかける。

「はあ、あゝ、いい」

しわがれたおばあさんの声がしておくから人影がやってきた。赤いずきんで顔を隠している。なんか弱々しい。

「これ一つください」

「ああこれね……2890円だよ」

え！？

「はい……わかりました」

「ちょ、ちょっと待ってよ逢。いくらなんでも高すぎじゃないか？」

「へ？ そうですか？」

「ちょっとおばあさん！ ボツタクリじゃないですかね？」

「……」

「おばあさん？」

「……う、うふふ……」

「……」

僕と逢は顔を見合わせた。なんか気味が悪い。

「あーっはっはっはっは！」

「「えっ！？」」「」

おばあさん（のはずの物）から聞こえてくるのはしわがれた声ではなく若い女性の声だった。

「いやーひっさしぶりだねえ、橘」

「……もしかして夕月先輩ですか？」

おばあさんはずきに手をかけるとそれを外した。

「いやあ……まさかこんなところで会うとはねえ！」

紛れもなく、夕月先輩だった。

「先輩、ここで働いているんですね」

「ああ、うちの祖母が倒れたからね。……で、そっちの子は彼女さん？」

「あ、はい。えーと……」

「七咲逢です。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。私は夕月流璃子。おーい！ 愛歌ー？」

「……熱々」

ってやつぱり此の二人はセットなのか。

「……それで二人とも同じ大学に進学したんですか？」

「ああ、そうだよ。あ、七咲。320円だよ」

「あ、はい」

払ってあげようかと思ったけどそれじゃあ逢からのおみやげにならないなと思ってやめた。

「……それがいい」

さすが飛羽先輩。僕の行動なんておみとおしか。

こうして僕らはおみやげを買った。

お茶でも飲んできなと言われたけど、日が暮れてしまつので僕は店をでた。

静かな空気がこの街を包んでいた。

## 第七話「買い物」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

いや、やっぱりこの二人は欠かせないです。大好きです。此の二人。個性的でなおかつ（ry

なんか七咲の出番が減ってるので次回は……とうとう……！

お楽しみに！

## 第八話「Kiss in the shrine」

夕暮れ時。僕と逢は人氣のない田舎道を歩いていた。そこはアスファルトで舗装されていなく、砂利道だった。ジャリジャリと心地良い感触が足の裏に伝わってくる。

「あ……」

「ん……？」

逢がなにかに気づいたように森のほうを向く。僕もそちらを見ていると生い茂った木の中になにやら石の柱が見える。

「あれって……神社ですよね？」

「ああ……そういわれてみれば鳥居に見えるね」

「行きませんか？」

「うん！ いいよ」

僕と逢は鳥居をくぐって神社の中に入った。境内は広く、そして静かでどこか懐かしい感じがした。

お賽銭箱に五円玉をほいと投げ入れて手を合わせる。

「……」

「……」

「……逢はなにをお願いしたんだい？」

「家族の安全と先輩と……もっと近づけるようにって」

逢が恥ずかしそうに答える。

「へえ、僕も逢ともっと心の距離を縮められますようにって」

「先輩……」

おっ、なにかいい雰囲気だぞ……

「あ、あのさ……逢」

「はい」

「キス……しないか？」

「は、はいっ!？」

逢が答える前に僕が近づいていつて肩をつかむ。

「ん……」

そつと目を閉じて逢のやわらかい唇に僕の唇を重ねる。

「……んっ……」

甘い香りがする……。

「先輩……」

「ん!？」

今……今! 口の中に入っているのは……逢の……逢の……! ンっ……!」

「先輩……大好きです」

ふわつと逢の腕が僕の肩を包んだ。

僕もそれに答えるように逢の小さな身体をそつと抱きしめる。

「僕もだよ、逢……」

「私は……とても幸せです」

神社の境内には静かにヒグラシが鳴き、遠くからは虫の綺麗な合唱が聞こえてきた。

## 第八話「Kiss in the shrine」(後書き)

こんばんは、お久しぶりです。七咲です。じゃなくて純一です。

夏もそろそろ終わりですね。

まなつか……そう、此の名前の由来……(以下略)

これからは受験受験……大変です。

だけど創作活動は辞めたくありません！

というか七咲が可愛すぎてなにかに目覚めそう。

アマガミ……早く二期やってくれー！

僕もこんな恋愛がしたかった……

それでは……

## 第九話「お・風・呂 with 梅原」

日が沈んだ頃、僕と逢は旅館に戻ってきた。梅原が迎えてくれた。  
「すまん、梅原。風呂はもう湧いているか？」

僕が尋ねると梅原はふつとため息をついて

「ああ、そっちの廊下の角を曲がったところにある」  
「どうもありがとう」

流石に梅原は事情をよく理解してしてくれる。ありがたい。

僕と逢は一旦部屋に戻って風呂の準備をしてから部屋を出た。

「それじゃあ、僕はこっちだから」

「先輩、覗かないでくださいよ」

逢がニヤニヤしながらそう言うてくる。まさか……僕がそんなことをするとも思ってるのだろうか。

「その……私は別にいいんですけど、他の人がいるので。先輩が捕まってしまったら私、悲しいですから」

「いや……！僕はそんなことしないって！」

「だといいんですけどね」

そう言うて僕と逢はそれぞれ行くべき場所へと向かった。

「よう大将！」

「う……梅原？！」

「なんだよなんだよー、まるでなんで従業員が普通に風呂入ってたって顔してさ」

「い、いや……」

確かにそうだけど、なんでこうタイミングを図ったようにいるんだよ。  
僕はすでに梅原が入っている温泉に入った。岩風呂でなかなかい

い雰囲気が出ていた。

僕と梅原以外の人はいなかった。

「ふう……いい湯だな」

「ああ、うちの自慢の露天風呂だからな。もう暗くなっちまってるが、さつきまでいい眺めだったんだぜ。夕日が目の前で山に沈んでいつてなあ……」

「そうなのかあ……見たかったな」

チャポンと僕はタオルを岩に投げて乗つけた。

「それで……七咲とは……」

「ああ……うん。前にも言ったとおりクリスマスの日からずっと付き合ってるんだ」

「へえ……それでねえ……」

梅原はやれやれこうやって泊まりで旅行なんてお熱いこったとつぶやいて視線を上に向けた。

僕もつられて上を向くと夜空には満点の星空が見える。

「綺麗だな……」

「ああ……」

「なあ」

「ん？」

「梅原はその……」

その先は続けることが出来なかった。

「あーあ！俺も彼女ほしいなあ！」

梅原はキラキラ輝く星空に向かって嘆く。

「ははは……」

大丈夫さ、梅原にもきつと……

「そんで……七咲とはどこまでやっちまっただんだあ？」

「いつ！？」

突然そんなことを訊かれては困ってしまふ。

「ど……どこまでって……そ、そりゃあ……」

「そりゃあ……?」

「は、あはははははははは!」

「へいへい。お熱いこった」

「ははは、ごめんよ梅原」

「いいってことよ! 俺はいつでも新たな出会いに向かって突っ走ってんのさ」

「いつもズッコケてるけどな」

「そ、それを言うなって!」

「あははははははははは!」

男子風呂からは二人の愉快な笑い声がずっと響いていた。

梅原に幸せあれ……

## 第九話「お・風・呂 with 梅原」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

二期の放送開始が、来年の一月からっていう噂ですね。  
しかもタイトルが『アマガミSS+(Plus)』  
楽しみで仕方ありません。

なんかアマガミSSのビジュアルファンブックがほしいです。  
めっちゃめっちゃ欲しいです。

しかし買ったところで置き場所に困るんですよ。

美術設定とかメチャほしいのに……

妹をどう陥落させて置き場所をGETするかが課題です。

それではもう残り短い夏休み！

皆さんにも青春あれ！！！！

それではっ！

## 第十話「お・風・呂 with 逢」

「やれ…… やつとひとりでくつろげる」

梅原はまだ仕事があるとかで風呂を出て行った。

「ふむ…… ここには混浴はあるのか……」

……こ、これは……！ 入るしかない！

「ま、まあ…… し、仕方ないよな。もし、そんなことがあっても……」

……」  
僕は一度上がって着替え、その隣にある『混浴』と書かれた魅惑ののれんをくぐった。

「……！」

さつと脱衣所を見渡す。

……さすがに誰もいないか…… はあ。

まあ、せつかく来たんだから入っていくとするか。

身にまとっていた着物を脱ぎ、かごの中に入れる。カラカラカラ

……とドアを引くと

「せせせせせせ……先輩！？」

「なっ、逢じゃないか！」

逢が一糸まとわぬ姿で温泉に浸かっていた。

これは……すごい……

「み、見ないでください！」

「ええっ!？」

逢はふいと僕に背を向けてしまった。

その背中も可愛い。

「逢……入ってもいいか？」

「……好きにしてください」

僕はそつと湯船に足を入れて

「ぬおっ!？」

足を見事に滑らせた。

「先輩！」

「うわあっ！」

ザッパーーーーン!!!!

水しぶきを上げて前のめりに湯船に突っ込む。

まずい。死ぬ。

「先輩！」

ぎゅっと目をつぶった。

そしてふんわりと優しく僕を包む感触。

「はあ……はあ……」

「だ、大丈夫ですか？」

逢が、僕を受け止めてくれた。

「う、うん！　ありがとう！」

いろんな意味で！

僕は逢の胸で受け止めてもらっていた。

小さいながらも柔らかい……。

「ひゃっ!?　先輩！　ちょ、ダメですって！」

「わわっ、ごめん！」

僕はさつとヤバい状況だということに気づき、逢から離れた。柔らかな感触が名残り惜しい。非常に名残り惜しい!!!!

「もう……先輩のエッチ」

「ははははっ！」

「ははははー、じゃないですよー！」

逢は真っ赤になってそっぽを向いてしまった。

「……ほんとにエッチな先輩なんですから」

「ははははっ！」

やばい……やばいぞ、橘純一！　逢に罵倒されるたびに下のボールテージがMAXに近づいていくぞ……!!

「静まれ……静まるんだ……」r……よ……」

「な、何いってんですか！」

「ははははっ！」

困ったときの『ははははっ！』頼みだな！

その後なんとか収まった。

危なかったあ……。

第十話「お・風・呂 with 達」(後書き)

こんにちは！ まなつかです！

これからは是非ともポルノ野郎と(r y

いや、これってありなのかなって思いながら書きました。

R15に指定するべきなのか……はたまた別のところでR18で  
連載すべきなのか……。

それでは。

## 第十一話「料理」

結局あれからちよつといろいろあつてから風呂をでて、部屋に戻つたのが8時だった。

「先輩」

「んー、どうしたー？」

僕は寝転がりながら備え付けのテレビをぼーっと見ている。

「夕飯つて、どうするんですか？」

「いや、そろそろくると思うよ……プツ……」  
「なんだよこれ……！」

「先輩？　ここまで来てテレビですか？」

「あ、う、うん……ごめん」

「もう、しょうがないですね」

「ははh」

「へい！　お待ちっ！」

威勢のいい声と共に戸がガタンと開き、梅原が入ってきた。

「夕飯の……」

「寿司……なのか？」

「んな馬鹿な。ここは山だぜ？　新鮮な山菜や川魚の料理だ」

「うわぁ……！　すごいですよ先輩！」

テーブルの上に次々と色とりどりの懷石料理が運ばれてくる。逢は目をキラキラさせてそれを見ていた。

「おお……たしかにすごい」

「すごい……すごいぞ……っ！　料理を覗き込む逢の胸元がはだけ  
t

「先輩、どこ見てるんですか！？」

「ええっ！？」

「おいおい大将……」

「い、いや……あはは……」

「もう……」

逢が恥ずかしそうにゆかたを整えた。梅原は「ゆっくりと言い残してその場を去っていった。」

「さて 食べますか!」

「うん、いただきます!」

## 第十二話「エキサイト」

「ふーっ、美味しかったですね」  
「そうだね」

僕達はあれだけ会った料理をほとんど平らげてしまった。やはり、子供の僕らの口には合わないものもあった。だけど逢は満足そうに笑みを浮かべてくつろいでいた。

「逢、旅館といえばなんだ？」  
「えっ！？ いきなりクイズですか？」  
「そうだ」

「んー」

目を宙に漂わせて逢は考える。

「あっ、おいしい料理と温泉ですかね」  
「ちがぁー……う！」

「え……」

間拔けた表情で僕を見つめた。僕はつい立ち上がってしまう。  
「旅館と言ったら浴衣！ そしてスリッパ！ そして卓球だ！ 卓球をしよう！」

「ええ！？ どこからそんなふうにつながるんですか！？」  
「ふっふっふ、僕の腕をナメるなよ」  
「いやいや、そんなコト言ってないです！」  
「それじゃ行こうか」

「聞いてくださいよ！」

僕は一方的に逢の手を握ると廊下へ出た。廊下は浴衣を着た家族がわいわい楽しそうに話していた。これから温泉だろうか。いや……卓球かもしれない。それだったら卓球台がとられてしまうじゃないか！

「行くぞ！ 逢！」

「ひえっ！ ちょ、ちよつと先輩！」

「……焦ることもありませんでしたね」

「はははは……」

この旅館に卓球台はない　そういうオチだった。僕と逢は仕方なく自販機で飲み物を買って休むことにした。

「あつ、この濃厚！ わんぱくバナナ美味しくないですよ」

「ははは、こんなところにもあったんだ、それ」

学校の自販機で買ってひどい目にあつたっけ……もう飲みたくないものだ。逢はよく飲めるなあ。

「先輩は……なんですか、それ」

「ふっふっふー、これはだな『エキサイトオレンジ』だぞ」

「な、なんですか、それ」

「飲んでみるかい？」

「はい……」

逢は恐る恐る僕から受け取った缶を両手で握ってコクリと一口飲んだ。　あつ、これって間接キス

「マズっ！」

「ええー！？」

「な、なんなんですかこれは！」

「な、何って……『エキサイトオレンジ』だよ！」

「なんかすごい口の中がエキサイトしちゃってます！？」

「それがいいじゃないか！」

こうして僕と逢は飲み物を飲んで休憩した。ははは、楽しかったな。

## 第十二話「エキサイト」（後書き）

ははは、なんか試験終わって楽しいです。

こんにちは、まなつかです。

なんかこうしてずっと小説を書いていたいです。将来作家になりたいですが、きっとその道は険しいので普通の職業に就きます。

感想・評価がありましたらご遠慮なさらずにどんどんお寄せください。

それでは。

### 第十三話「一触即発!？」

「先輩」

「んあー？」

僕はテーブルの上にあった避難経路を示す図をぼんやりと眺めていると同じくこの旅館のパンフレットをペラペラめくっていた逢が嬉しそうにテーブルの上にパンフレットを置いた。

「どうしたんだ」

「見てください、これ」

「……庭？」

「そうです、この旅館には庭があつて夜になるとライトアップがあるみたいなんですよ!」

「へえ……いいじゃないか」

僕は立ち上がると逢の手を取った。

「じゃあ、一緒に行こうか」

「はい! 行きましょう!」

僕と逢は地図にしたがつて旅館の中央の方へと向かっていった。ここに大きな庭があるらしい。どんなものか僕も見たい。

「あ、あの人って……」

逢が立ち止まってロビーの方を見る。僕もそっちのほうを見た。

「え」

あ、あの方は……否、あの方は……!

「逢! 逃げるぞ!」

「えっ!? は、はい!」

まさかこんな所に綾辻さんがいるなんて! 去年手帳を拾ってか

ら恐ろしい目にあつて逃げ続けている。なんでもその手帳を見たものは学校にこれなくするとか……。

僕は逢の手をぎゅっと握った。彼女はえっ？ という表情で僕を見上げた。大丈夫、僕は死なない。逢がいる限り　というかなんてこんな所に綾辻さんがいるんだよ。まあいい。関わらないように逃げよう。

「逢、愛してるからな」

「シャレですか?!　本気ですか!?　　っていうか、先輩死なないでくださいよ!」

僕は庭園に向かって急いだ。

そう、鬼から逃げ惑う人の様に

第十三話「一触即発!？」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

綾辻さんは裏表のない素敵な人です！

感想・評価、待ってます！ それでh

ぎゃーーー！

## 第十四話「庭にて」

「はあ……はあ……なんとか着きましたね」

「ああ……」

僕たちは必死になって走ってきたので息も切れ切れだった。だけど

「……綺麗……」

「そうだね……」

逢がゆつくりと身体を起こした。そして僕の方をずっと見つめる。先輩と来れて良かったです」

逢は可愛らしくにこりと笑い、僕の腕に自分の腕を絡めた。

「僕も逢と来れて本当に良かったよ」

日本庭園は静かで、木々がライトアップされていたりしていた。ほかにも何組かカップルが見える。

「先輩、ちよつと屈んでもらえますか？」

「あ、うん……」

なにをされるのかは予想がついた。そう、この雰囲気、キスしかない！

「かたぐるましてください」

「へっ……！？」

屈んできたから逢を見上げながら僕は素っ頓狂な声を上げた。

かたぐるま……？

「いいじゃないですか」

逢はちよつと恥ずかしそうにもじもじしながら僕におねだりをしてくる。……か、可愛い。

「しょ、しょうがないなー。ほら、いいよ」

僕は背中を逢に差し出した。

「えい！」

逢が僕の背中にぴよこりと飛び乗った。暖かい感触と、微かに柔らかな感触を感じる。暖かい吐息が首もとにかかり、少しくすぐったい。

「よっ！」

僕は一気に立ち上がった。

「わぁ……ここから庭が一望できます！」

逢は嬉しそうにそう言った。

「僕は見えないから僕の方まで観ておいてくれよ」

「えへへっ、わかりましたよー」

逢はうれしそうに笑いながら庭を堪能していた。僕は僕で逢の足の感触や……まあ色々堪能した。

#### 第十四話「庭にて」(後書き)

こんばんは、まなつかです。

今回のお話は新しく買ったNECのLifeTouchNote  
を使って書いています。

いやー、キーボードがあるとなかなか便利なものです。まあ、今  
まではパソコンでそっちの方が便利でしたけどね。

それでは。

## 第十五話「クラスメイトの嫉妬」

「あつ……」

逢が僕の肩の上で小さな悲鳴を上げる。

ん……なんだろうか……んんっ!?

「こんばんは、橘くん」

「あ、綾辻さんっ!？」

浴衣に身を包んだ僕が世界で一番おそれている少女がそこで不気味な笑みを顔に浮かべていた。      やばい。

「あ、綾辻さんもここに来ていたんだね」

とりあえず無難な話題を振っておこう。僕は逢を下ろしながらそう言った。

「それカノジヨ？」

話聞いてねえー!?!?

「は、はは。まあ……そうだよ」

「ふうーん、こんな人にもできるのね」

「ちょ、やめてください!」

逢が叫ぶ。日本庭園が一瞬静かになった。

「先輩はいい人なんです。あなたは何か誤解しています!」

「……………」

綾辻さんはジロリと僕を一瞥してからにつこりと花のような笑顔を浮かべた。

「      なーんてね。ごめんなさい、あなたたちが羨ましかったから  
      ついついイジメたくなっちゃったのよ」

（先輩、この人怖いです）

逢が「オホホホホホホ!?!」と高笑いしている綾辻さんを見てこっさり僕に耳打ちした。

（はははっ、確かにそうだけど見かけはいい人だよ）

（結局中身ダメじゃないですか！！！）

「ま、二人のムードを邪魔ちゃってごめんなさいね。私は家族でここにきたのよ。毎日センター試験の勉強でストレスがたまっていたからいい気分転換よ。それじゃあ、ごゆっくりね」

「あ、うん……」

綾辻さんはそれだけ言い残すと颯爽と庭園を出て行った。

「先輩……クラス、大変そうですね」

「なんで二年連続になったんだろうね」

「……先輩、今度は私が何か奢ってあげます」

「えっ！？ どういうこと？」

「なんだか邪魔されて先輩すねちゃってますから」

「う……」

やっぱり僕は顔に出やすいのかなあ……。

「じゃあ行きましょう、ほら、そこに抹茶を手軽に楽しめるところがあるんですよ」

「えっ、じゃあ行ってみようか」

「はい！」

逢はにこりと笑って僕の手をその小さな手できゅっと握った。僕もその柔らかい手をきゅっと握り返した。

## 第十五話「クラスメイトの嫉妬」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

いや、なんかすごい暴風雨でして学校が休みになっています。  
みなさん、暇つぶしに小説でも読んでみては？

感想もお待ちしておりますのでどんどんお寄せください！

## 第十六話「二人で抹茶を」

「へえ、すごいね。結構本格的な感じだよ」

「ええ、そうですね……」

庭園の一角にはいつか茶道部で見たようなセットがあった。

そこで一人の女性が着物を着て抹茶を点てている。

「無料ですよ。いかがですか？」

「はい、ぜひともお願いします！」

そう張り切って答えると逢がつんつんと僕のわき腹をつついてきた。

（何デレデレしてるんですか！）

（誤解だよ！ してないって！）

逢はぷーっと膨れてしまっていた。可愛いなあと思う。僕と逢は赤い布がかぶせてある椅子に腰をかけた。

「どうぞ」

女性が二人分、お茶とお菓子を出してくれた。僕らは礼を言ってから受け取り、抹茶を一口飲む。

「……………逢？」

「……………先輩」

「あはは……………」

苦かった。なんていうか、これが日本の美って奴ですね！

甘い和菓子でなんとか飲みきった。

「なかなか普段できない経験ができましたね」

「うん……………そうだね」

いい経験だったよ。うん。

「たーちばーな先輩」

「ん？」

逢が僕の腕に自分の腕を絡ませてきた。

「そろそろ戻りましょう」

「そうだね、もう遅いや」

僕らは庭園を後にした。途中綾辻さんに会うことはなく、無事に部屋まで帰ることができた。

## 第十七話「問いかけの時」

僕は部屋に戻って他愛もない話をしたりした。学校のこと、友達のこと、美也のこと……。気がつけばもう11時を回っていた。

「逢、そろそろ寝ないと」

「あ、……はい……そうですね……」

急に逢は顔を朱く染めて下ばかり見ている。

「どうしたの？ あ、トイレ先使っていいけど」

「ち、違うんです……！」

ぱつと顔を上げてそしてまたすぐに戻す。

ん。いったいこれはどうすればいいんだ……あ、もしかして！

一緒に寝ようか？

熱い夜と一緒に過ごさないか？

寂しいの？

困った。

どれも素晴らしい。

「寂しいの？ 一緒に寝ようか？ 熱い夜と一緒に過ごさないか？」

「へっ！？ はいっ！？」

逢はさらに顔を赤くして僕を驚いたまなざしで見つめる。赤い逢もまた可愛いものだ。

「逢……」

僕は近寄ってその赤い逢の頭を撫でた。綺麗な髪だな、と思う。さらさらしていて気持ちがいい。逢は俯いたままだった。

「……たし、」

「ん？」

「私、先輩と一緒に布団で寝てもいいですか？」

逢が目だけをこちらに向けて尋ねてきた。

「うん、いいよ」

「よかった……」

「それだけのことなのにどうしてそこまで……？」

「いえ、子供らしく思われてしまうのではと思ってまして……」

僕は逢の頭から手を離して畳に手を突いた。

「はははっ！ そんなこと思わないよ。逢はいつも大人びているじゃないか」

「そうですか……？ あ、でも先輩よりはそうかもしれません」

「はははっ……」

笑うしかなかった。

## 第十七話「問いかけの時」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

最近更新頻度が落ちていますが、やはり受験勉強が結構あって大変なんです。ご了承ください。

さて、この物語も一泊二日ですのでそろそろ次回予告でも。

橘「次回予告っ！」

美也「嬉しそうだねーにいに」

橘「はははっ！ 七咲との旅行はすごい楽しいぞ！」

美也「うわー！ にいにだけずるいよー！」

橘「ははっ、だけどこんな楽しい話も後少し。この小説が完結したら次は梅原が主人公のお話だ」

美也「ウメちゃんの？ あ、また鬱小説でしょ」

橘「僕と七咲がクリスマスに温泉を満喫しているとき梅原は香苗さんに思いを伝えていた。それはとても悲しい話の幕開けだった」

美也「うわっ、何それっ！？」

橘「……………次回、今回の小説のサイドストーリー」(タイトル未定)『！』

美也「未定なの！？」

橘「お楽しみに」

まなつか「それでは、また今週の火曜日にお会いしましょう」

〓 提供 〓

日々平和

く鬱な未来を切り開こう！く

## 第十八話「告白」

「それでは電気消しますね」

「うん」

この部屋に並べた布団は一枚。特に夏だから風邪を引くなどの心配はないだろう。僕は仰向けに寝転がったまま逢が隣に来るのをドキドキしながら待っていた。

「先輩」

「ん？」

「……えっと……その……」

「大丈夫、おいで」

「はい」

逢が隣に寝転がる。近くに体温を感じる。こんなにも近くて、愛おしい。そんな存在が逢だった。僕は彼女が一番大切だ。ずっとずっと大切にしていきたい。

「逢」

緊張した空気がこの部屋を満たしていた。だけど二人にとってそれはとても気持ちのいいことなのかもしれない。耳を澄ませば近くの田んぼからカエルの合唱がここまで聞こえてくる。そしてすぐ近くで逢が呼吸をする音も聞こえてくる。

「な、なんですか、先輩」

「ずっと……ずっと、これからも逢のこと好きだから」

途端にカエルの鳴き声が止んでしんとした時間が流れる。

思わず息をのんでしまうほど静かだった。

隣に逢がいる。それだけが何故か儚く、寂しかった。

「どうしようもないくらい不安で……はは」

「先輩……」

逢はそつと顔を僕に重ねた。

そのキスは特別だった。

「大丈夫です」

「失いたくない人が、この世で一番大切な人ができたのは初めてだよ」

「……先輩、それって私以外の女の子にも言うんじゃないんですか？」

「そんなことないさ、逢」

僕は上半身を起こした。いつの間にか月が出ていて逢に僕の影を落とす。

「結婚しよう」

「えっ………？」

## 第十八話「告白」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

なんだか段々文章が重たくなってきましたね。

やっぱり場面に気合いを入れるとどうしても「ライトノベル」にならないんですよ。

それとお詫びを。

梅原が主人公の話ですが、ちょっとあまりにも残酷すぎる内容です。でアマガミの二次創作としては書かず、オリジナル小説として投稿します。興味がある方は是非。

それでは、来週もまた。

## 第十九話「旅の終わり、新たな始まり」

大きく見開いた逢の瞳。

その瞳に迷いはなかった。

「先輩、こちらこそお願いします」

「逢、ずっと大切にするね」

「はい、もちろんです」

僕は逢を押し倒した。

月光に照らされた逢の表情は微かに微笑んでいた。

「かまいませんよ」

深く口づけを交わし、どこまでもお互いを知ろうとした。

重ね合った身体、逢の吐息、うめき声。

時折見せる逢の表情はたぶん、僕と同じだったと思う。

ああ、これが幸せか。

二年と半年前からこれだけ僕は変わった。

人生なんて努力次第でなんでも変えられるものだ。僕はこのとき初めてわかった。

翌朝、汚れてしまったシーツを梅原は何も言わずに持って行って

くれた。きっとこの部屋に割り振って貰ったのも彼の配慮だろう。

「先輩、準備できました」

「うん、それじゃあ行こうか」

僕と逢はいろんな思い出が詰まった旅館を後にした。

外にでるとああやっぱり夏だなんて思う。

蝉は僕らに飽きさせずに同じ声を聞かせていた。鳥は気持ちよさそうに川で水浴びをし、子供たちは虫取り網を持って森を駆け回っていた。

「楽しかったですね」

逢はやっぱりちよつと疲れた表情でバスの窓の外を見ながらそう言った。僕はその姿を見て少し安心した。

僕らはきつといつまでも、この夏が終わっても、一緒だろう。

強い日差しと車内のクーラーの音がまだ夏だということを示している。

「どこか寄り道していかない？」

逢はここにいる。僕の隣に。ずっと、いつまでも

終わり

## 第十九話「旅の終わり、新たな始まり」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

ものすごい断腸の思いでの最終話の執筆でした。

まだまだ書いていきताかったです。

だけどこの19話の19という数字。

「イク」と「行く」をかけているということは(r y

はい皆さん朗報です！

今回の話のノンカット番がなんと公開決定！

逢と橘さんの生々しい描写が(あきよう「やめる！」まなつか「ぐっほっ」)

……ということで次回からはアマガミの二次創作の筆は一旦置かせていただきます。

アマガミSSの二期(アマガミSS Plusと言うのですが)を楽しみに待ちつつ、勉強に専念するといいつつ小説を書いていきたいと思います。

「ほんととは七咲じゃなくってあの子の小説を書いてほしかった！」

「梅原×橘で書いてくれ！」

「何言ってるんだよ！ 橘×ウメだろ！」

「つつーか更新停止している小説早く書けよ！」

「18禁！ 18禁！」

などのご意見・ご感想がありましたらじゃんじゃん送ってください。

(この物語はハクションです。実際の七咲逢、変態紳士、寿司屋の

息子、綾辻さんは裏表のない素敵な人ですは存在しません)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9040v/>

---

僕と逢との一泊二日

2011年10月10日03時15分発行